

京都・平安京跡右京六条三坊六町

1 所在地 京都市右京区西院溝崎町

2 調査期間 二〇〇四年(平16)四月～六月

3 発掘機関 (財)京都市埋蔵文化財研究所

4 調査担当者 南 孝雄

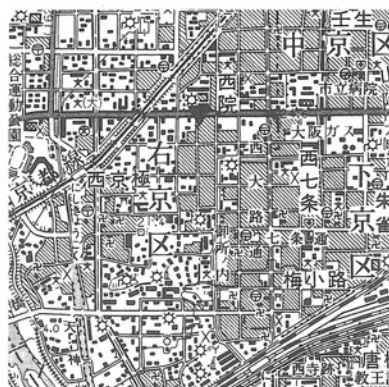
5 遺跡の種類 都城跡

6 遺跡の年代 平安時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査は、会社施設建設に伴って実施された。調査地は六町の南西部にあたり、調査では馬代小路側溝、掘立柱建物、井戸などを検出した。今回報告する人名が墨書された男女一対の人は、井戸SE一から出土した。

馬代小路側溝は延長三〇mにわたって検出しており、幅四m以上、深さ一・二mを測る。遺物はほとんど出土しなかった。側溝の



(京都西南部)

西屑は調査区外となるため確認できなかったが、規模からみると道路側溝というより河川と呼ぶ方が相応しい。これまでの平安京内の調査によれば、九世紀後半以降の右京では、雨水が氾濫しやすい地形に対応するため、いくつかの道路を排水路として造り替えていることが判明しており、この馬代小路もその例になるものとみられる。調査区北西部に位置するSB一は、二間×五間の身舎に両廂の付く南北棟建物である。柱間は桁行・梁間ともに八尺(二・四m)、廂の出は九尺(二・七m)である。井戸SE一はこの建物の南一〇mの地点で検出された。掘形は一辺三m、深さは二・五mを測る。掘形四隅には柱穴が検出されており、井戸覆屋を伴っていた。井戸枠は抜き取られている。埋土は大きく四層に分かれ、最上層の第四層の黒褐色粘質土からは、土師器・須恵器などとともに、櫛、斎串、「吉」銘墨書土器など祭祀具とみられる遺物がまとまって出土した。これらの遺物は井戸廃棄時の祭祀に伴うものとみられる。報告する人形二体は、これとは別に第三層の灰褐色粘質土より出土した。同伴遺物はなく、第四層出土遺物とは性格が異なることが窺える。井戸から出土した土器類の年代は九世紀初頭に位置付けられ、建物と井戸は平安京遷都後間もない頃のものであることがわかる。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「葛井福万呂
葛井福万呂」

(2) 「檜前阿古□□」

165×25×13 061

(1)は男性像の人形。人名は左胸と右胸に一行ずつ墨書されているが、腹部にかかる下半の一部は墨書の後、削り取られている。一木を削り出して立身を模り、足をやや屈曲させている。後ろに回る両腕は、別材で作った木釘で固定する。頭部は烏帽子状に、顔部は目・鼻・口を削り出す。墨書きによって頭髮、睫毛、瞳、口髭、顎髭が表現される。

(2)は女性像。人名が胸部から腹部にかけて墨書されている。腕は欠損しているが、体部側面上方には、腕を後ろ手に固定するための切り込みや木釘痕が残り、男性像と同様であったことがわかる。頭部の形状は髪を結いまとめた頭上一髻を表現していると思われる。胸部や腹部は男性像に比べてややふくらみ、ふくよかに表現されている。材質は二体ともにスギ材。

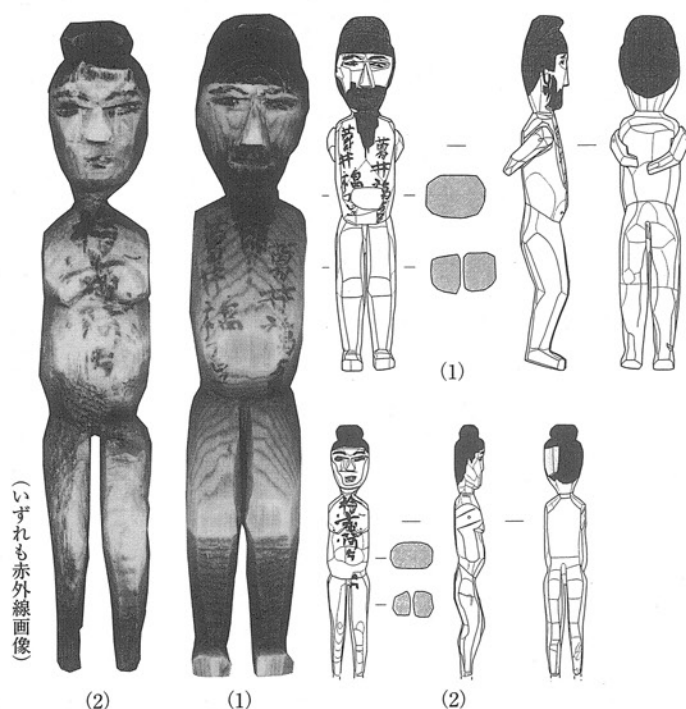
「葛井」「檜前」はともに下級官人を輩出した渡来系氏族であり、下級官人の居住地として、今回の木簡の出土地点は相応しい。男女の人名が墨書された人形は、平城京や平安京内でも出土例があるが、今回のように立体形に作られるものはない。手を後ろに回し足を少し屈曲させる姿は罪人を思わせる。このような形状からみて、これらの人形は男女の和合や厄払いを目的としたものではなく、呪具として使用されたものかと思われる。

なお、釈読については京都大学の西山良平氏、人形の性格については奈良大学の水野正好氏からご教示を得た。

9 関係文献

(財)京都市埋蔵文化財研究所『平安京右京六条三坊六町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報二〇〇四―一、二〇〇四年）

(南 孝雄)



(いずれも赤外線画像)